令和元年度「九州地区西洋古典資料保存講習会・実習」実施報告

Report on the Course for Librarians on Conservation of Western Historical Materials in Kyushu District

山下　泰史・篠田　飛鳥・堀越　香織

Yamashita Yoshifumi, Shinoda Asuka and Horikoshi Kaori

1　はじめに

2019 年 12 月 12 日（木）・13 日（金）に，九州大学附属図書館を会場として，同図書館及び九州地区国立大学図書館協会と共同で九州地区西洋古典資料保存講習会と保存実習を開催した。社会科学古典資料センター（以下「センター」という）では，40 年近くの歴史を持つ「西洋社会科学古典資料講習会」や 20 年近く継続する「西洋古典資料保存講習会」を長く国立キャンパスで実施してきた。2018 年度には前述の 2 つの講習会に加え，文部科学省共通政策課題として概算要求の採択を受けた「西洋古典資料保存のための拠点およびネットワーク形成事業[1]」（以下「事業」という）の一環として，東北地区西洋古典資料保存講習会を東北大学附属図書館と共催した[2]。これはセンターとして初めて一橋大学外で行う講習会であった。本稿では，2018 年度に続き 2 回目となる地域保存講習会の開催について報告する。

2　九州大学附属図書館，九州地区国立大学図書館協会との連携

一橋大学では，事業終了後も地域保存講習会の継続を構想していた。事業の最大の成果である資料保存実務研修の修了者数は限られており，多くの図書館職員に保存の知識や技術が行きわたるためには，実務研修修了者の所属大学図書館と連携して，その地域の大学図書館等の職員向けの講習会を順次開催することで，全国の資料保存水準の底上げを進めていきたいという考えである。昨年度の初回開催地が東北地区であったため，2 回目は西日本での開催が望ましいと考え，九州大学附属図書館（以下「九州大学」という）に講習会開催を打診した。

九州地区では資料保存に関する研修の機会が少なく，また遠方のためセンターで開催する講習会への参加が難しい大学も多いことから，打診を積極的に受け入れていただいた。また，当講習会を九州地区国立大学図書館協会会員館職員研修ワーキンググループ（以下「研修 WG」

1　鈴木宏子「平成 28 年度～ 30 年度文部科学省共通政策課題（文化的･学術的な資料等の保存等）『西洋古典資料保存に関する拠点およびネットワーク形成事業』の 2 年間を終えて」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』6 号, 2018, p.1-11.
http://doi.org/10.15057/29422（参照 2020-01-16）

2　鈴木宏子，篠田飛鳥，山下泰史「平成 30 年度『東北地区西洋古典資料保存講習会』実施報告」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』39 号, 2019, p.24-29.
http://doi.org/10.15057/30236（参照 2020-01-16）

という）の活動の一環と位置付け，令和元年度国立大学図書館協会地区助成事業として申請し，助成を受けることができた。これにより，研修 WG のメンバーも運営を担いつつ，講習会を受講することができ，また助成により受講者の負担なく実演実習用の材料や道具を用意することができた。

開催にあたっては，九州地区大学図書館協議会の後援を受け，九州地区の国公私立大学図書館職員を対象とした講習会として実施することができた。

3 講習会のプログラム作成

プログラムは下表の通りである。プログラムは九州大学が原案を作成し，センターと調整しながら決定した。九州大学では 2008 年に「資料保存セミナー」として講義と実習を 2 日にわたり開催しており [3], 今回もそれにならって講習会と実習を行いたいとの要望があった。両者で検討を行い，1 日目に講習会，2 日目に実習を実施することとした。

九州地区西洋古典資料保存講習会プログラム

12:30-13:00		受付	
13:00-13:05		開会挨拶	九州大学附属図書館長　宮本 一夫
13:05-13:25	事例報告	「西洋貴重書保存インデックス」のご紹介	一橋大学学術・図書部学術情報課 古典資料係長　堀越 香織
13:25-13:45	事例報告	図書館移転における資料保存の取り組み	九州大学附属図書館利用者サービス課 理系参考調査係　吉丸 梓 参考調査係　西 真里恵
13:45-14:05	事例報告	保存容器さまざま	九州大学附属図書館収書整理課長　山口 良子
14:05-14:15		休憩	
14:15-16:35	講義・実演・事例報告	予防的保存・今私たちができること	一橋大学学術・図書部学術情報課 古典資料係　篠田 飛鳥　山下 泰史
16:35-16:55		質疑応答	
16:55-17:00		閉会挨拶	九州大学附属図書館事務部長　瓜生 照久

講習会の資料は以下で公開されている。

(1)「『西洋貴重書保存インデックス』のご紹介」 https://hdl.handle.net/10086/30968
(2)「図書館移転における資料保存の取り組み」 http://hdl.handle.net/2324/2547230
(3)「保存容器さまざま」 http://hdl.handle.net/2324/2545081
(4)「予防的保存・今私たちができること」 https://hdl.handle.net/10086/30967

九州地区西洋古典資料保存実習プログラム

9:00- 9:10		受付 開会挨拶	九州大学附属図書館収書整理課長　山口 良子
9:10-11:55	実習	保存箱作成・保護ジャケット作成等	一橋大学学術・図書部学術情報課 古典資料係　篠田 飛鳥 石井 悠香　（講師補助） 山下 泰史　（　〃　） 九州大学附属図書館　原賀 可奈子（　〃　） 羽賀 真記子（　〃　） 佐方 小弓　（　〃　） 西 真理恵　（　〃　）
11:55-12:00		閉会挨拶	

[3] 羽賀真記子「九州大学附属図書館における資料保存への取り組み」『大学図書館研究』89 巻, 2010, p.20-26.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcul/89/0/89_1336/_pdf/-char/ja（参照 2020-01-16）

講習会では，まず一橋大学及び九州大学の事例を報告し，そののちにセンターによる講義・実演・事例報告を行った。事例報告はセンターによる古典資料保存管理の指標となる「西洋貴重書保存インデックス」の紹介から始まり，九州大学より同大学のキャンパス移転に伴う図書館移転に係る資料保存の取り組み，保存容器の種類や使用方法について報告があった。続くセンターによる講義・実演・事例報告では，昨年度同様，これまでのセンターの取り組みや集積してきた資料保存に関する知識・技術を実演を交えながら講義することとした。会場は九州大学中央図書館内のアクティブラーニングスペース「きゅうとコモンズ」内の講習会スペースとした。

実習では九州大学から要望のあった保存箱作成，保護ジャケットの作成を行った。実習会場は，九州大学中央図書館内の会議室を使用した。

4 受講者について

12 日の講習会受講者は 37 名であった。会場の九州大学がある福岡県を中心に，長崎県，大分県，熊本県，宮崎県，鹿児島県，沖縄県の九州地区 7 県と，京都府，大阪府からも参加があった。また公共図書館からも 1 名の参加があった。受講者の中には，「西洋社会科学古典資料講習会」や「西洋古典資料保存講習会」の修了者も見られた。改めて資料保存に対する関心の高さがうかがえる。

13 日の実習は，講師の人数の都合上，受講者数を 10 名に限定せざるを得なかった。選考は研修 WG が行った。実習における受講者数は今後の課題としたい。

5 講習会の実施内容

（1）事例報告「『西洋貴重書保存インデックス』のご紹介」

はじめに，一橋大学より，講習会開催の背景として事業の内容と成果を紹介した。特に，成果の一つである「西洋貴重書保存インデックス」について，目的や内容，使用法，効果等を説明し，活用を勧めるとともに，2019 年春に各大学図書館等へ回答を依頼した，本インデックスを使用した「西洋古典資料保存に関する全国調査」の集計・分析結果をセンター年報に公表予定であることを報告した。全国各地に所蔵されている西洋古典資料の保存水準の向上は，各所蔵館単独での取り組みには限界があり，ネットワークを作って取り組むことの重要性を強調し，本講習会受講者は今後ネットワークの一員として，講習で得た知見を周囲に還元してくれるよう依頼した。

（2）事例報告「図書館移転における資料保存の取り組み」

続いて，九州大学のキャンパス移転に伴う資料保存の取り組み，特に状態の悪い資料をどのように移転したかについて報告があった。マイクロ資料，カビ被害資料，虫害，特殊形態資料の 4 つの観点から，移転時の状態悪化・移転後の被害拡大を防ぐために，移転前にどのような処置を行ったかを豊富な資料を示しながら報告された。移転に伴う作業ということだったが，平時にも行える作業がほとんどなので，今後資料整理を行う上で非常に参考になると感じた。

（3）事例報告「保存容器さまざま」

次いで，九州大学で使用している様々な保存容器が紹介された。前の報告でもあったとおり大量の保存容器の需要に短期間で対応する必要があり，コストを抑えるため，資料 1 点ごとにオーダーメイドするのではなく，資料を採寸して集計し，分類し，規格化して，必要な数量を

算出し，汎用性のある容器をセミオーダーで作成したとのことであった。会場後方には保存容器の実物が展示され，実際に手に取ってみることができた。創意工夫が見られ，たいへん参考になる報告であった。

（4）講義・実演・事例報告「予防的保存・今私たちができること」

ここでは前回の東北地区西洋古典資料保存講習会と同様，講義と実演を行った。センター保存修復工房のこれまでの取り組みを紹介した。前回の講義内容を基に，今年度から新たに行った施策も盛り込み，より現実的に出来ることを考える内容とした。受講者が資料保存を具体的に感じられるよう，配付資料を「ステープラ綴じ」ではなく「糸綴じ」とするなど，前回と同じく工夫を凝らした。

長時間の講義なので，今回も講義の中間部に実演を組み込んだプログラムとし，厚ジャケット，保存箱，封筒フォルダを作成した。前回と同様にビデオカメラを設置して実演時の講師の手元をスクリーンに投影し，作業の様子を受講者が可能な限りはっきり見られるようにした。実演の最後には，前もって加工しておいた中性紙の封筒とボード紙を受講者に配付し，講師が封筒をボード紙に貼付ける様をスクリーンで見ながら，実際の貼付け作業を体験した。ほんの少しの作業でも，完成品を配付するより保存容器を身近なものとして感じられるのでは，という前回同様の試みである。

講義の最後には，センターが常に念頭においてきた「現物保存の大切さ」，特別な理由がない限り現物には「『積極的に』手を加えないこと」を行うために何が必要なのかについて伝え締めくくった。

途中休憩を挟んだが，140 分という長丁場の講義にも関わらず受講者は熱心に講義に耳を傾けていた。また，保存容器への関心が非常に高く，後述する展示品も，休憩時間や講義前後に熱心に見学していた。

（5）展示

講習会会場後方に，九州大学およびセンターで作成，使用している保存容器類を展示した。受講者は実際に手に取って，構造や使用感などを確認することができた。また，九州大学スタッフの機転により，講義で言及された資料採寸用計測器，電子顕微鏡，虫害トラップなどの機具も追加で展示された。それらの機具を初めて目にする受講者もいたと思われる。受講者にはたいへん参考になったであろうことはもちろん，九州大学とセンターでは違う製品を使っているものもあり我々も参考になった。

（6）九州地区西洋古典資料保存実習

東北地区西洋古典資料保存講習会と大きく異なるのは，2 日目に実習の時間を設けた点である。実習では資料のドライクリーニング，保存箱作成，保護ジャケット作成を行った。大判の中性紙加工やカッター等の刃物を使用した作業を行いやすいよう，机のサイズやレイアウトに気を配った。実習で使用するほとんどの道具は，九州大学が必要数を用意した。

受講者には，実習で保存容器を作成したい資料を持参していただいた。実習の準備として，1 日目の講習会受付時に受講者から持参資料を預かってサイズを計測し，保護ジャケットと保存箱に使用する中性紙を九州大学及びセンタースタッフが準備した。

実習は講師の篠田がまず手本を示し，その後受講者が同じ作業を行う形式とした。手本は作業

開始から完成まで一息に見せるのではなく，工程を適度に分割し，受講者が手順を理解し確実に作業できるよう配慮した。保存箱については細かいマニュアルプリントを作成し配付したが，これは受講者がメモをとりながら作業を行うのは効率が悪いため，各自の復習用という位置づけで配付した。受講者が作業を行っている間は九州大学及びセンタースタッフが受講者に適宜アドバイスを行うなどのサポートを行った。九州大学には通称「資料保存班」というグループがあり[4]，そこに参画するメンバーにサポートしていただいたおかげで，滞りなく実習を行うことができた。

今回は九州大学に資料保存に明るい方々がいたため 10 名の受講が可能となったが，今後は内容を工夫するなどし，より多くの受講者を受け入れられるよう検討する余地がある。

6 アンケート意見 まとめと成果

12 日の講習会，13 日の実習についてそれぞれアンケートを行った。

（1）講習会：回答数 29 件

講習会に関する全般的な質問項目として，「開催時期」「講義時間」について質問した。

開催時期について，26 名が「適切」と回答したが，「5 月，6 月，7-8 月，11 月」という意見や，「新規職員が入り，時期的に落ち着いた 5 月や 6 月頃に開催されるとより効果的ではないか」という提案があった。講義時間に関しては，ほとんどが「適切」と回答したが，「短い」という回答も 4 名あった。開催時期や講義時間に関しては，今後の参考としたい。

各講義に関しては，「大変参考になった」「参考になった」との回答を得た。「『西洋貴重書保存インデックス』のご紹介」のご紹介」及び「図書館移転における資料保存の取り組み」に関しては「大変参考になった」「参考になった」がおおよそ半々程度であったのに対し，「保存容器さまざま」及び「予防的保存・今私たちができること」はほとんどが「大変参考になった」と回答した。自館の状態の確認や個別の事例といった理論的な講義より，保存容器という物自体の紹介や保存環境・保存処置に関する実際的な講義のほうが受講者の関心を惹いたと考えられる。

受講者の属性に関する質問も行った。自身の担当業務は「サービス系」20 名，「資料管理系」13 名，「システム系」2 名，「その他」3 名であった。

普段の業務で西洋古典資料を取り扱う機会があるか訊ねたところ，「ある」17 名，「ない」12 名だった。現在西洋古典資料を取り扱う機会がなくても，保存・修復への関心が高いことが分かった。

今後自分で保存容器類を作成する機会はあるかという質問には，「ある」14 名，「ない」5 名，「わからない」10 名だった。また，自分で保存容器類を作成する機会はこれまでにあったかという質問には，「あった」17 名「なかった」12 名であった。両質問とも「ある」の回答者には作成頻度を訊ね，どちらも「年に数回」から「週に 1 点以上」まで，中には「蔵書点検や資料の受け入れ時に必要に応じて作成する」という回答もあった。頻繁に作成しているという印象を受け，2008 年の資料保存セミナーの成果と考えられる。

---

[4] 九州大学では，附属図書館研究開発室に職員が参画して，専門性の向上を図ることを可能とする体制を整えている。なかでも「コンテンツの形成および保存に関する調査研究」事項には複数の職員が参画している。本実習では，当該事項に参画する職員が講師補助を務めた。

（2）実習：回答数 8 件

講習会と同じく，全般的な質問項目として「開催時期」「講義時間」について質問した。開催時期について 8 名全員が「適切」と回答した。講義時間に関しては 7 名が「適切」, 1 名が「短い」と回答した。

保存箱作成，保護ジャケット作成それぞれについての満足度は，どちらも全員が「大変参考になった」または「参考になった」と回答した。受講者にとって有意義な実習となったことがうかがえる。

自由記述では, 別内容で再度の開催の要望や「実際に何度もやってみないと身につかない」「今後技術を磨く方法・講習会などを紹介してほしい」といったフォローに関する感想・要望が見られた。

全体的に好意的な評価を頂戴し，受講者にとって実りのある講習会・実習となったことがうかがえる。また，自由記述において非常にたくさんのコメントが寄せられ，どのコメントも今後の参考になり，また励みになるものばかりであった。

7 謝辞および今後に向けて

本講習会の実施と成功には，九州大学および研修 WG の多大なるご尽力があった。突然の打診にも関わらずセンターの事業と意図をご理解いただき，通常業務の合間を縫って，企画から実施に至るまでご支援いただいた。特にセンターとの窓口となっていただいた，実務研修修了者で「西洋古典資料保存のためのネットワーク」協力員の原賀可奈子氏にはこちらからの要望に的確に対処していただいた。また 2008 年の「資料保存セミナー」開催を担当された羽賀真記子氏をはじめ資料保存班の皆さんからも，様々なサポートを頂戴した。厚く感謝申し上げる。

本講習会の契機となった「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」事体は 2018 年度をもって終了したが, 事業で形成した「西洋古典資料保存のためのネットワーク」をこのような形で活かせたことは大変喜ばしいことである。

のちに，九州大学では本講習会の 2 週間後に実習受講者が講師となって館内実習を行ったことを伺った。講習会で得た知見・経験がさっそく伝搬されることは，センターにとって非常にうれしいことであった。九州大学には九州地区の西洋古典資料保存の拠点として，今後もセンターとの連携を期待する。

2016 年 6 月に第 63 回国立大学図書館協会総会で採択された「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて ～国立大学図書館協会ビジョン 2020 ～」[5] は来年度で一つの節目を迎える。貴重資料はビジョンの中で，希少性が高く管理責任が大きい資料と定義されている。センターは，これまでの取り組みで蓄積した知見・経験を基に「西洋古典資料保存のためのネットワーク」を活用して全国の西洋古典資料保存水準の底上げを図り，ビジョンの実現に努め，学術研究の推進に貢献していきたい。

---

[5] 国立大学図書館協会「国立大学図書館の機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン 2020 ～」国立大学図書館協会 .
https://www.janul.jp/ja/organization/vision2020（参照 2020-01-16）